令和8年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【岸町小学校】

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する資質・能力	(1)既習事項を活用しつつ、知りえた情報を関連付けてとらえることができる資質・能力 (2)目的や相手に応じて、適切に自身の考えを表出できる資質・能力 (3)自己を高めるため、失敗を恐れず、課題発見・課題解決に粘り強く取り組むことができる資質・能力
⇓	
実施する学力向上策【時期・頻度】	(1)子どもたちの学習活動を、文章や資料から事実の抜き出しや単一のデータの読み取りのみで終わらせず、「差異点や共通点」など情報の再構成を伴う学習場面や「なぜ」という背景や関連性を問うて推論を促す場面を十分確保した授業の実施。【毎授業】 (2)児童自身が自分の意見・考えに対する「根拠」を明確にできるよう問いかけ・声かけの工夫。iPad活用も含めた発表形式の選択や説明資料の準備など児童が主体的に学ぶ授業の実施。【毎授業・各単元末など（各教科・各単元の特性に応じて）】 (3)本校の課題研修、体育科における「仮説・検証・再現」を他教科にも活用し、「仮説・意見の伝え合い→比較検討→協働的に検証・実践→結果からの修正・再構築」というプロセスを学習の基盤とした授業の実施。【各単元を通して】

⑤	年度末評価	
学力向上策の実施状況	評価（※）	
⇓		
今年度の成果と次年度の課題		

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	

③	中間評価	
学力向上策の実施状況	評価（※）	
⇓		
学力向上策の見直し		

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【岸町小学校】

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ 国語では漢字学習の定着度合い、算数では四則計算の活用度合いに差が見られる。 ＜指導上の課題＞ 授業中・家庭学習を両輪とし、児童が基礎的な学習に取り組み、復習する機会を確保する必要がある。	⇒	従来の練習問題（授業）や宿題（家庭学習）に加え、児童が主体的・補充的に取り組める「ドリルパーク」「スタディ・サプリ」等も活用し、基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図る。同時に、SSDB等を活用し、教員が適切に児童の理解度を把握したり取組への姿勢を評価したりする。【毎日実施】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ 国語「書くこと」に関する問題、算数「場面を想定した」応用的な問題に正対することに課題が見られる。 ＜指導上の課題＞ 児童がどの段階で躓いているのかを把握することで個に対しての支援を考えていく必要がある。	⇒	国語の文法・作文指導等、文章表現の基盤となる学習を充実させ、児童の「書くこと」への不安感を払拭する。【学習計画に沿った時期】 自他の考えを表現し合い、受け入れ合う言語活動を、特定の教科に限らず適宜設定する【毎日実施】 個々の発表・制作やグループ学習では、個に応じた課題設定ができるよう、学習内容を正確に把握できる導入の工夫を実施する。【毎日実施】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語・算数どちらも高い数値を示している。高い水準で考えた場合、課題を挙げるならば、以下が考えられる。 国語では「情報の扱い方に関する事項」が挙げられる。文章や図解などを捉える際、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方に不慣れな児童がいると考えられる。学習内容や単元の目標に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う学習を意図して授業に取り入れていく。話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら聞き、自分の考えをまとめる機会も増やしていく。 算数では「分数の意味や表し方を理解（数と計算）」と「身の回りのものの大きさを単位を用いて表現する（測定）」の2項目においては他の項目と比べるとやや苦手と感じている児童がいると考えられる。また、数直線や計量器などめもりの読み取りを踏まえた問題であったことが共通しているので、「目盛りが表す数」の捉え方にも注目していく必要がある。
思考・判断・表現	国語・算数どちらも高い数値を示している。高い水準で考えた場合、課題を挙げるならば、以下が考えられる。 国語では「文章中の情報の取捨選択・整理・再構成」「複数文章から導かれる目的・意図の読み取り」「要旨をとらえる・要旨をまとめる」といった学習内容に課題が見られる児童もいる。いずれも「目的に応じて」という点が共通していることから、活動内容や単元の目標を明確に理解できる授業を今後も続けていく。合わせて、自分の考えを文章で書いたり、言葉で相手に伝えたりする活動をより一層充実させていく。 算数においては、特定の領域と考えるよりも、答えを導き出すまでの過程を言葉や式、図を使って表現することを苦手としている児童がいると考えられる。解答までのプロセスを大切に扱い、一人ひとりが考えを表現できる時間を十分に確保していく。また、題意に対して正対した解答に課題が見られる児童もいる。今後の授業において、題意を正確に捉えられるよう、全体指導に加え個別の指導もこれまで同様充実させていく。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	「ドリルパーク」「スタディ・サプリ」等は授業後に復習やまとめとして活用するだけでなく、定期的に振り返る機会として家庭学習の課題に取り入れることで、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に効果を出している。 SSDBに関しては、児童の発達段階や教科の特性によっては、同一形式や同等の頻度で行うことが難しく、学年・学級による差異が現状見られる。	SSDBの活用体制を整備していく。【通年】
思考・判断・表現	A	「書く」活動も含め、自分の考えを表現する言語活動においては、各学年、児童の実態に応じて取組を充実させている。既存の表現方法にとらわれず、タブレット端末などICTを活用したり、表現方法や発表形式を児童自身が選択する機会を設けたりするなど個に応じた学習としても効果を発揮させている。	ICTの効果的な活用方法・個別最適な学習の実践方法などの研修を定期開催し、一層充実させる【通年】

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語の漢字の読み書きや算数の計算といった基礎的な学習に関しては、非常に高い習熟度が伺える。そのため、本校の傾向として、強いて今後の「伸びしろ」といった点で考えると、次の点があげられる。 国語では、文脈の中で適切な言葉を選ぶ等「語句の意味と使い分け」や「文法」における助詞や丁寧語等の理解には今後力を入れて指導をしていく必要がある。漢字練習では短文を書かせるなど意図的に言葉の意味や使い方を意識させる機会を増やしていく。 算数では、単位の換算や大きさを量感としてとらえる「量と測定」の領域と計算方法や公式が成り立つ理由など「概念」に関して深く定着を図っていくことが必要だとかんがえる。
思考・判断・表現	知識・技能同様、本校児童の正答率は非常に高い数値といえる。子どもたちの思考力は十分と言える。あえて、今後の「伸びしろ」を考えていくと次の点が挙げられる。 国語では、「長い文章や複数のポスターから、必要な情報だけを抽出して整理すること」「自分の考えを書く際に、適切な根拠（資料の数字など）を引用して、論理的な構成で表現すること」等、単なる読み取りで終わらない場面では課題がみられる。 算数では、「複数の数値が出てきた際、どちらを元にするか」「どの式を適用すべきか」といった判断を迫られた際に、根拠を持って選択できる力を高めていく必要がある。また、グラフなどにおいては読み取るだけでなく、データとして目的に合わせて活用していく力が望まれる。 国語と算数いずれの点においても「判断の理由を言葉にする活動」を介することで力を高めていくことができると考える。

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	A	児童が主体的・補充的に取り組む手立てとして、既存の「ドリルパーク」等だけではなく、児童が進んで取り組みたくなるような目標や成果を感じることができるよう教材の工夫を図る実践が多く見られた。結果、児童の学習への意欲の高まりが見られた。発展的な学習にも進んで取り組もうとする児童も多かった。前述の取組を教員間での実践報告研修を介することで、多くの学年での実践に結び付けることができた。
思考・判断・表現	A	授業での活動では「文章で書く」にだけ捉われることなく、「表現する」といった形で、児童自身がその表現方法を選択したり、意見共有の際に友達に提示したりするなど、主体的に学びを進めていく姿が多く見られた。ICTの利用にとらわれず、プレゼンテーションソフトを使っての発表、タブレットで作成した資料の掲示や展示、紙に書いた内容を写真でとって共有、といったようにデジタルやアナログを組み合わせ、「自身に合うように」「課題に沿うように」といった視点を子どもたち自身がもてる活動が授業内で多く行われた。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	SSSDの組織的・実践的活用が来年度の本校に求められていることと考えられる。収集したデータの分析にも力を入れつつ、実際に教員が接して得た児童の様子、といったデータと感覚の両者を混然一体とした児童理解に注力し、一人ひとりの児童にとっての最適な学びに結び付ける授業づくりを進める。また、児童理解という点において、全教職員に差異がないように研修にも十分力を入れていく。
思考・判断・表現	「答えが一つではない問い」や「資料を2つ以上組み合わせて考えるべき課題」などを学習内において意図的に取り入れるなど、発展的な活動により一層力を入れていく。その結果、「情報の取捨選択」「根拠の明確化」「既習事項の応用」といった、学習上状況調査の結果から窺える本校児童の「伸びしろ」に大きく働きかけることができると考える。